

● 虫賀 幹華 特定助教

Tomoka MUSHIGA (Assistant Professor)

研究課題: 前近代と近代におけるヒンドゥー教の連続性と非連続性—聖地と聖地巡礼の発展史から
(The Continuity and Discontinuity in Pre-Modern and Modern Hinduism:
Focusing on the Development of Sacred Places and Pilgrimages)

専門分野: 宗教史、インド学 (Religious History, Indology)

受入先部局: 文学研究科 (Graduate School of Letters)

前職の機関名: 日本学術振興会/京都大学大学院文学研究科

(Japan Society for the Promotion of Science/ Graduate School of Letters, Kyoto University)



現代インドに生きるヒンドゥー教徒たちの営みに触れるとき、古代から引き継がれてきた様々な要素を見出すことができます。彼らもまた、古代インドの宗教文化を自身の信仰と実践の基礎として説明します。他方で、「ヒンドゥー教」という「宗教」の形は西洋人とインド人知識人によって近代に創造されたという指摘があります。そしてヒンドゥー教が単一の洗練された「宗教」であるという見方は、多様性を捨象し、ヒンドゥー教の優越性を強調する今日のヒンドゥー至上主義につながります。そうした「ヒンドゥー教」の見方を前提とせずに、現在までのヒンドゥー教の歴史を描くにはどうしたら良いのでしょうか？私はこれまで、ヒンドゥー教の現在の姿が歴史的にどう形作られてきたのかを現地調査と文献研究の両方から探ってきました。二つがつながる瞬間が最も楽しいのですが、単純には接続させられないこともわかってきました。本研究は、中世・近世期に大きく発展し、現在でもインドで盛んに行われている聖地巡礼の歴史を対象として、近代以前と以後の連続性と非連続性を描き出すことを目指します。

When we come into touch with the activities of the Hindus living in India today, we find various elements inherited from ancient times. They, too, consider the religion and culture of ancient India as the basis for their beliefs and practices. On the other hand, it has been pointed out that “Hinduism” as a form of “religion” was created in the modern era by Westerners and Indian intellectuals. And the concept that Hinduism is a single and sophisticated religion leads to today’s Hindu nationalism, which discards diversity and claims the superiority of Hinduism. How can we describe the history of Hinduism to the present without assuming such a formed “Hinduism”? I have explored how the beliefs and practices of modern Hindus have been shaped historically through field research and Sanskrit literature. I feel the greatest pleasure when the two connect, but I have also realized that these should not be connected simply without historical examination. This project aims to draw continuities and discontinuities between the pre-modern and modern periods focusing on the history of sacred places and pilgrimage in Hinduism, which developed particularly during the medieval and early modern periods and still flourish in India today.

現代インドへの関心を背景にもつヒンドゥー教史研究

従来インドの宗教文化研究では、時代横断的な視野を持ち、学際的な研究を進めることのできる者は非常に限られていた。主にサンスクリット語の文献を扱う文献学者と現代を対象とする人類学者の間に全く交流がなかった状況はいささか改善されつつあるものの、それぞれの方法や問いの立て方があり、根本的に関心の異なる者たちが集まったところで有意義な研究成果は生まれ難い。一人の研究者が両方に目を配ることで初めて浮かび上がってくる姿がある。本研究は、現在のヒンドゥー教を捉えるのに、今見えているものだけでなく、宗教史を踏まえた上でのアプローチの仕方を提唱

することを将来的な目標として行われるものである。

18世紀後半から、イギリス東インド会社が各地で勢力を拡大し、西洋人によるインドの宗教文化に関する研究が盛んになった。そのなかで形成された「宗教 (religion)」としての「ヒンドゥー教 (Hinduism)」像は、インドの人々の意識にも影響を与えた。現在ヒンドゥー教徒であると自認する人びとの信仰と実践の体系が、どのように形成されてきたかを探ろうとすると、この近代における転換に注意を払う必要がある。「ヒンドゥー教」を古代から存在する実体として捉えるべきではない。では、近代に何がどう変わり、何が変わらなかったのか。その考察のために本研究では、現在でもインド各地に存在するヒンドゥー教の聖地と、盛

んに行われている聖地巡礼の歴史を対象とし、以下の二つの方法で研究を進める。

ヒンドゥー聖地の発展の全体像を描き、宗派的信仰と正統派の関連を考える

インドの宗教文化の最も古い形態を伝えるのは、紀元前1200年頃に編纂された『リグ・ヴェーダ』をはじめとするヴェーダ文献であるが、聖地巡礼についてまとまった記述が最初に現れたのは、4世紀頃までに現在の形になったとされる叙事詩『マハーバーラタ』においてである。その後「プラーナ」文献群において、シヴァあるいはヴィシュヌという神格を最高神として仰ぐシヴァ教・ヴィシュヌ教の隆盛のもとで聖地と聖地巡礼は大きく発展し、さらに特定の一つの聖地を主題とする「マーハートミヤ」が各地で作成されていく。そして12世紀から作られ始めた「ダルマニバンダ」という文献群で、『マハーバーラタ』やプラーナ他、法典（スメリティ）類などからの引用をふまえ、聖地巡礼は重要な主題として論じられた。近代における変化に取り組む前に、近代以前、特に中世・近世期における聖地と聖地巡礼の発展に焦点を当て、膨大な数のサンスクリット語文献の記述を整理することが本研究の一つ目の方法である。ここでやりたいのは、プラーナおよびマーハートミヤの記述からシヴァ教・ヴィシュヌ教という宗派的信仰に基づいて聖地がどのように発展したのかを捉えること、他方で、ヴェーダの伝統に重きを置く正統派のダルマニバンダの記述がそれらとどう異なるのかを見極めることである。近代以降の「ヒンドゥー教」像にとらわれずに、より多様で複雑でありつつも、「ヒンドゥー」としての何らかのまとまりの意識も存在していたことを聖地の記述から描いてみたい。



図1: 聖地ガヤーでの祖先祭祀の実施風景。祖先祭祀（Śrāddha）はヴェーダ時代においても重要な儀式であり、現在でも行われている。これを聖地で行うことはヴェーダ時代にはなかった習慣で、そのプラーナ、マーハートミヤ、ダルマニバンダにおける説明を整理したい。宗派的信仰に基づく記述では、祖先祭祀の記述にシヴァやヴィシュヌといった神の関与を付加しようとする。

聖地プラーヤガと祭礼の歴史から「聖典」に辿れない部分を捉える

本研究の二つ目では、北インドのウッタール・プラデーシュ州の聖地プラーヤガと、同地で12年に一度開催されるクンバ・メーラーという大祭の古代から現代までの歴史を詳細に扱う。聖地の現在の姿の形成過程を探るにはサンスクリット語の「聖典」の記述だけでは不十分で、中世・近世期の地方語文献、史資料、碑文、遺跡、現在の信仰と実践といったさまざまな情報源を駆使することにより初めて可能になる。そもそも、現在のヒンドゥー教の形成過程がサンスクリット語文献のみから明らかにできるとする姿勢は、本研究で問題にしている単一の「宗教」としての「ヒンドゥー教」像と密接に関係する。興味深い例を一つ挙げておくと、クンバ・メーラーの古さや権威を主張しようとする聖職者や現代のパンフレットは、その起源をヴェーダ文献に遡らせようとするが、実際にはヴェーダはもとより、プラーナやマーハートミヤにも記述がなく、この祭礼は出家遊行者の宗派・教団が大きく関与することにより発展したものと考えられる。



図2: 2013年のクンバ・メーラーにて。プラーヤガでは大混雑のため写真撮影ができなかった。これはクンバ・メーラー後にヴァーラーナシーという別の聖地に流れてきて、シヴァ・ラートリという祭日の機会に行われた出家遊行者の行進の様子である。

参考文献

- Mushiga T. (2023). The Development of the Rules of Ancestral Rites Performed in Sacred Places: Examination of the Tristhalisetu and Other Dharmanibandhas, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 71(3), 948–52
- 虫賀幹華. 2022. 「1年間の祭事からみるヒンドゥー教徒の信仰と実践」佐藤史郎・石坂晋哉編『現代アジアをつかむ』明石書店, 401–415.
- Mushiga T. (2020). Authorisation by Using “the Past”: The Development of the Gayā Pilgrimage Programme, *Indian Historical Review* 47 (1), 54–83